

(9) 我は聖霊を信ず

村上伸

イザヤ書 42 章 1 節-4 節
コリントの信徒への手紙一 12 章 1 節-3 節

「兄弟たち、霊的な賜物については、次のことはぜひ知っておいてほしい。あなたがたがまだ異教徒だったころ、誘われるままに、ものの言えない偶像のもとに連れて行かれたことを覚えているでしょう。ここであなたがたに言っておきたい。神の霊によって語る人は、だれも『イエスは神から見捨てられよ』とは言わないし、また聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えないのです。」

今日は使徒信条の最後の部分に入ります。第 3 項と呼ばれていますが、「われは聖霊を信ず」というところから終わりまでは『聖霊』に関する告白です。その最初の言葉を取り上げたいと思います。

「聖霊を信ずる」とはどういうことでしょうか。聖書はしばしば霊について語っています。先程司会者に読んで頂いたイザヤ書の 42 章は、「主の僕の召命」に関する箇所ですが、1 節の後半に「彼の上にわたしの霊は置かれ」と書かれています。主の僕と言われるあの不思議な人物は、神の霊を受けて、それによってすばらしい仕事をこの地上で展開していく。そういう力を神から与えられている、というのがさっきの言葉でした。

もちろんそれだけではなくて、旧約聖書の中には霊を受けるということについていろいろと書いてあります。一般的には、霊というのは「ルーアーツハ」というヘブライ語で、これはもともと「息」のことです。口から出る息ですね。それを一番よく表した箇所は創世記 2 章 7 節以下の神がアダムとエバを造られた時の記述です。これは 1 章に書いてあることとはちょっと違うのですが、資料が違うからです。

2 章 7 節に、「主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」とあります。「鼻に命の息を吹き入れられた」というのは勿論神話的な表現ですが、これは人間というものの現実を非常によく表しているとわたしは思っています。「土というのは滅びやすいものという意味ですね。人間は誰でも死ねば土になるという永い間の人類の経験から、この考え方が出てきたと思いますが、神は土で捏ねて人の形を造られた。そしてその鼻へ命の息を吹き入れられた。人間はそれで生きるものになった。一これは私たちが経験している根源的な人間の命の現実をよく表していると思いますね。滅びやすい、壊れやすい弱い体と心を持っている私たちが日々生きているのは何故か。外から命の息が吹き入れられているからです。ですから「息」という言葉が、「霊」という言葉と同じだというのは大変象徴的です。息によって象徴される生命力は外から私たち一人一人に与えられている。人間が本来自分の内に内在する力によって逞しく生きるというのではないのでありまして、聖書の人間観はそういうものではない。もともとは弱く崩れやすい私たちが日々生きているのは、上

から私たちに与えられる神の命の力によるのだというのです。さっきの私の歌にも「私の霊をあなたの上に置く」とそういう言い方がありましたけれども、これもそういうことなのでしょうね。「しかし、霊でありさえすれば常に良いものか」というと、そんなことはない。「真実の霊」、今お話したような本当に人を生かす命の霊、命の息という意味での霊もありますけれども、「偽りの霊」というものもある。「悪の霊」です。最近私たちが経験したことで言えば、例えばオウム教の場合です。あれだけ多くの知識人が、教祖の言うなりになって殺人集団になって行く。これは多くの人々が指摘しておりますように、悪霊に取り憑かれたとしか言いようのないような経過だったと思います。そういう形で悪霊とか偽りの霊というものは存在するのですね。

ドストエフスキーは「悪霊」という小説を書きました。彼は革命が嫌いで、革命的な運動のことを多少そういう形で見ていたようですが、何かこの世界を現実に関心している霊のようなものがあると見ていたらしいんです。よく「時代精神」と申しますでしょう。その時代時代によって何か訳のわからない、それこそ悪霊の働きとしか言いようのないようなものによって動かされて人々がどーっとそっちのほうに動かされていく。戦争中の日本はまさにそうでありました。

皆さん御存じのドイツの前の大統領のヴァイツゼッカーさんのお兄さんカールフリードリッヒ・フォン・ヴァイツゼッカーは、もともと物理学から出発して哲学の世界に入っていった人です。その人が戦争中に、ナチスにある意味ではのめりこんでいった時期があるんですね。そのことを戦後非常に恥じまして、「いったいあれは何だったのか」とある文章に書いています。ナチスが台頭して世の中をぐんぐん引っ張って動かして行った時に、ちょうどペンテコステのような、外から来る力に私も足元をすくわれた、と書いています。それを偽ペンテコステと言いました。そのことを彼は非常に恥じまして、戦後自分のなかにあるナチズムを克服したいと願って、今では平和の哲学者と呼ばれて、本当に世界の平和のために考え活動する人として生まれ変わりました。彼が「偽ペンテコステ」と言った時には、やっぱりそういう時代精神の中にうずまいていて、人々をわあっとそっちのほうに動かして行ったのだと思います。ですから、霊と言っても、良い霊もありますけれども、そういう悪霊のようなものもあるのです。そのことを大変良く書き表した箇所がヨハネの第一の手紙にあります。4章1節から6節までです。そこには「偽りの霊と真実の霊」というタイトルがついています。

「¹愛する者たち、どの霊も信じるのではなく、神から出た霊かどうかを確かめなさい。偽預言者が大勢世に出て来ているからです。²イエス・キリストが肉となって来られたということを公に言い表す霊は、すべて神から出たものです。このことによって、あなたがたは神の霊が分かります。³イエスのことを公に言い表さない霊はすべて、神から出ていません。これは、反キリストの霊です。かねてあなたがたは、その霊がやって来ると聞いていましたが、今や既に世に来ています。⁴子たちよ、あなたがたは神に属しており、偽預言者たちに打ち勝ちました。なぜなら、あなたがたの内におられる方は、世にいる者よりも強いからです。⁵偽預言者たちは世に属しており、そのため、世のことを話し、世は彼らに耳を傾けます。⁶わたしたちは神に属する者です。神を知る人は、わたしたちに耳を傾けますが、神に属していない者は、わたしたちに耳を傾けません。これに

よって真理の霊と人を惑わす霊とを見分けることができます。」

そう書いてあります。

現実問題として真理の霊と偽りの霊があって、一見したところ区別がつきにくい。つまり人々の心を動かして、強力にそっちの方に引っ張っていくという力が双方にあります。人でいいますと説得力を持っています。さっきナチズムの話をしましたけれども、あのヒットラーという人物は、大変な雄弁家でした。彼が話すと人々はつい誘われていく。彼の言っていることは本当なんじゃあないかとみな信じたわけですね。そういう説得力、力をもっていました。

霊的な力、あるいはカリスマを持っている。しかし、だから良いいってことにはならない。麻原彰晃だってある意味ではカリスマを持っています。説得力もある。ですから多くの人々が誘われて行きました。しかしだから良いとはいえません。偽りの霊は、説得力とかカリスマ性という点から見て似ているように見えますけれども、だからといって正しいとは言えないのです。

真理の霊と偽りの霊を区別しなければいけない。第二世紀に入る前の頃から、キリスト教はよくいろんな霊があると言い、それを区別しなければならないということを申しました。「諸霊の分離」といいます。

その場合の試金石は何か。このヨハネの手紙はここでは「イエス・キリストが肉となって来られたということを公に言い表す霊はすべて神から出たものです」(2節～3節)といっています。それから、「イエスのことを公に言い表さない霊はすべて神から出ていません、これは反キリストの霊です」(3節)。このように、一応尺度みたいなものが示されています。決め手は「イエスのことを公に言い表しているかどうか」という点にあるのだというんですね。

しかしそれだけではちょっと分かりにくいと感じられる方があるかもしれません。「イエスのこと」というのはなにか。いくらか暗示されているのが2節の最初の言葉です。「イエス・キリストが肉となって来られた」ということ。これは受肉のことを言っているのですが、イエスは私たちの世界に本当に来られ、私たちと同じように人間として生きられたのだ。神が人となった。そういうことです。ですから一応受肉のことをちゃんと信じているかどうかということが試金石になるといえると思いますけれども、それをもう少し具体化したいと思います。それは3章の16節です。

「¹⁶ イエスはわたしたちのために命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。」

イエスがこの世界で、本当に我々の一人となって、兄弟となって、生きられたという。そのことを内容的にいうと愛ですね。神が私たちが愛してくださっているということ。それを彼は言葉と行いを持って私たちに明らかにした。そして出会う一人一人殊に世の中からつまはじきにされてみんなから相手にされないような人々をも本当に大切にされた。そしてそのために命を捨てた。だから私たちもお互いに人を大切に生きていくのではないか。そういうことをイエスは明らかにした。「イエスはわたしたちのために

命を捨てててくださいました。そのことによってわたしたちは愛を知りました」。

このことを信じて、言葉と行いをもって明らかにしていく。それがイエスのことを公に言い表すという言葉の内容でしょう。神の愛を信じることが出来るように心を開く、そして一人一人に互いに愛し合って生きる力を与える。そういうものとして「真理の霊」は来るといふんです。「真理の霊」は、そういうふうには私たちに動かしていく。

そういう力を与えないもの、つまり他者を憎むように教えたり、憎しみのエネルギーをかきたてるようなもの。そういうものはどんなに偉そうなことを言っても「偽りの霊」です。あのナチズムのことを再び思い出しますが、日本の歴史にもそれと似たようなことがあった。私は戦争中陸軍の学校におりました時に、到る処で憎しみを教えられました。愛してよい存在というのは一つしかない。それは日本であり天皇であり日本民族である。アメリカであろうがイギリスであろうがソ連であろうが中国であろうが、それらはすべて我々の敵であって憎まなければならない。そういうふうには、寝ても覚めても憎しみを教えられました。ナチズムもそうでした。ユダヤ人に対する憎しみ、そしてドイツ民族以外の者に対する憎しみ。憎しみこそ唯一のエネルギーだったのです。そしてそれがあの時代ではある意味で説得力を發揮しました。

聞いて従った一人一人にも責任が無いとは言えないけれども、そういう形で時代を動かしていく力が、「悪の霊」が、渦巻いていました。しかしどんなに力強い、偉そうなことを言っても、本当に愛し合って生きていくための力を与えないものは偽りの霊です。

聖霊は真理の霊です。聖霊は我々の中に入ってきて、愛の真理に向かって私たちを導いていく神の力です。私は聖霊を信ずる。私たちがそういうふうには愛の真理を教えられ、そこに向かって生きていく力が与えられることを信ずる。そういう真理の霊が私たちに与えられると約束されている。そのことを私たちは信じる。「我は聖霊を信ず」といふのはそういうことです。

少し前後するようではありますけれども、自分たちの日毎の経験に戻って、その辺のところを考えてみたい。ちょっと話が飛ぶようではありますけれども、私たちが生活の中で何か新しいことを知るといふ経験をしていきますね。その時に起こることを考えてみたいんです。

知るといふことは、知識の量が連続的にだんだん拡大していくことだと、私も考えていた時期がありました。でもこの頃そうではないと思います。連続的に知識の量が拡大していくということじゃあないのではないかと。

最近孫たちが時々訪ねて参ります。上の子がそろそろ 10 才になるのでしょうか、小学校に行くようになって体もそれから知恵もどんどん成長している。そのことを見ていると嬉しいんですけれど、時々はっとすることがあります。時々ぱっと飛躍することがある。私たちが何かを知るといふことは、そういう事なのではないかと。

私は若い頃、数学が嫌いでした。どう考えても分からない。ところがある時に友達か誰かがひょっと何か言ってくれたことがヒントになって、突然問題が解ける。そういう経験をたまにしました。あゝ そうだったのかと思うんです。

そうすると腑に落ちる。日本語には「腑に落ちる」という言葉があります。すっと

腑に落ちる。解る。これはひとつの飛躍です。或いは「目から鱗が落ちる」。これも日本語にあります。目にかかっていた鱗がはらりと落ちるんですね。今まで見えなかったことが見えてくる。そういう時の言い知れない知的な感動といひましようか、喜びといひましようか、これは皆さんも、おそらくすべての方がそういうことを経験していらっしやるんだらうと思ひます。私たちの中にそういう一種の飛躍というものがあって、そしてそれはたいていの場合、他者との出会いによつてもたらされます。

自分ではどう考えても解らない。しかし彼がちょっと何か言つてくれたことがヒントになつてはつと目から鱗が落ちるというような経験をよくします。それを私たちは「インスピレーション」とか「靈感を感じた」などと言ひますね。そういうことが私たちの生活の中にはあるのではないでしようか。

ある飛躍が起こる。しかもそれは誰か他の人との出会いによつて、偶然としか思へないような出会いによつて、はつと気がついて、今まで解らなかつたことが解る。腑に落ちる。目から鱗が落ちるという経験。これはいわば超越的な経験だと私には思われます。私たちの中にある知識は、草花が自然に伸びていくみたいに自然に増えるのではなくて、飛躍的に増えていく。一般的な知識の世界でもそういう構造があると思ひます。まして、信仰に關することではよけいにそうです。

私は信仰について時々考えさせられますが、信仰においてはまさにそうなんです。私は長い間女子大学で学生さんたちに教へてきました。みんな頭の良い学生たちです。受験戦争を突破して入つてきた良くできる学生たちです。望み得るかぎり最上の教育を受けて、最も良い知的な訓練を受けてる人達でも、信仰のこととなると解らないと言ひます。聖書に書いてあることはどうも解らないと言ひます。知的に劣つてゐるわけじゃないんです。性格がゆがんでゐるということでもないのです。人間として立派だし、知識量もある。いろいろ勉強もしてゐる。だけど信仰に關することでは、解らない。「だからこれは人間の知的能力とか、人間に内在する力によるのではないんです。まだ聖霊を受けていないということなのだらうと思ひます。まったく逆に、私のこれ迄の牧師としての経験から申しますと、学校にもろくに行つた事もなくて、字も平仮名ぐらゐしか読めない人の中に、聖書を夢中になつて読み、そしてその理解は誠に的確であるという人がゐる。この人達の事も考えます。これは人間が持つてゐる知識量という事ではないんです。何かやっぱり外からその人の心を開く力が加わつて、そこで飛躍が起こつたのだと言わざるを得ません。

「知識は大事ですし、それを身につける訓練も大切です。しかし、その知識の場合も、さっき言ひましたように飛躍という体験はありますね。そういう構造が信仰についてもあると思ひます。聖霊を受ける。そのことによつて「私はそのことを信じる」といふことができるようになる。そういうことだらうと思ひます。

ですから、コリントの信徒への手紙(一)に

「ここであなたがたに言つておきたい。神の霊によつて語る人は、だれも『イエスは神から見捨てられよ』とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言へないのです」 (12章3節)

という言葉がでてくる。聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言へ

ない。聖霊とは、神の聖い霊です。神そのものですが、見えざる働きをする神の在りかた。聖霊というのは、言葉で説明することはなかなか難しいけれども、強いて説明するとすれば、それは私たちの中に入り込んで来て、私たちを内から動かす神の力と言えるでしょう。私たちの中に働きたもう神です。

天地を造った神とか、天にいる神とかいうのは、私たちの外におられる神ですね。イエス・キリストも歴史的な事実として、客観的な存在です。私たちが信じようが信じまいが、イエス・キリストはあの時、歴史の中で生きていた。しかし、神はそういう客観的な形で存在するだけでなく、私たちの中に入って来て、心の扉を開き、私たちを内側から動かして行く力として私たちの中に住みたもう。それが聖霊です。その霊が私たちを動かす時に、私たちは「イエスは主である」という告白をすることができるようになります。

いつ聖霊を受けるかということは、人によって違うでしょう。初代の弟子たちはあのペンテコステの日にそれを受けました。みんな大勢で集まっている所に聖霊が下ったといわれています。しかし聖霊というのは、ある一定の時にある所でだけ働くというものではないのです。最初の方で言いましたように、聖霊とは「息」とか「風」とかいわれる。形が無い。風が自由にどこへでも行くように、聖霊はいかなる障害物も乗り越える。自由に働きます。聖霊はどんな人の所にも必ず到達します。早い人も遅い人もいるかもしれません。しかしいつか必ず私たちのもとに来ます。そしてその人の心を開いて、神が私たちをこんなにも愛していてくださるということ信じさせ告白させます。そして希望を与えます。そういう形で神が、見えざる神が私たちに働きかけています。

キリスト教信仰はそのことを信じるのです。「われは聖霊を信ず」。私のところにも聖霊が来る。命の息の働きが私たちを内側から動かす。私はそのことを信じます。

「われは聖霊を信ず」。皆さんのところに、日々その神の命の息がいつている。目には見えない形で皆さんの中に入り込んで動かしている。そしていつか心を開く。そういう神の在り方、これが聖霊です。

(日本基督教団みくに伝道所 1997年2月9日礼拝説教)